

はっきり言おう。このアルバムはハロルド・メイバーンが65年の生涯で噴出させた最高の傑作である。理由を言おう。ハロルド・メイバーンらしさが最も著しく強く出ているからである。

メイバーンらしさ、とはなにか。「のり」である。メイバーンは「のり」のピアニストである。メイバーンを知るにはライブに行くにこしたことはない。否、ライブへ足を運ばなければわからない。私はそう、はっきりと断言してしまう。

メイバーンの巨大なのりはCDなどという小さいものに封じ込めることは不可能だということが、ライブ会場で明確に理解できるのである。これまでのメイバーンのディスクはメイバーンの傀儡だった。世をしのぶ仮の姿だった。だからメイバーンという人が、その「のりの巨人」にもかかわらず今ひとつ人気が沸騰しなかったのである。

今回のディスクはそれを払拭した感がある。メイバーンは好きなんだけど、どうも実体がひとつ不明だった。このように考えておられる方。このディスクに接して快哉を叫ばれたことだろう。万歳三唱されたに違いない。そうだったのか。メイバーンとはこういうのり一発の人だったのか。ようやく本質を掴んだ。ようし、これからメイバーンとさらに親しくしてゆくぞ、これまでのメイバーン盤を改めてもう一度聴いてみるぞ。あなたはこれまでにない雄々しい顔をつくられたに相違ない。メイバーンの新しい門出。門出といえば、本日は2002年の正月の3日である。

私も今、もう一度、試聴盤を聴き直し、改めてメイバーンののりに胸のすく思いを味わったところだ。なんといっても1曲目のピアノの一言を耳にただけでのりの門出が伝わってくる。なんだか今までにないメイバーンののりの充実が伝わってくるのだ。

ヴィーナスレーベルで、ひょっとして、ジャズメンは本性を表すといったら、諸君はどのように反応するだろう。違うんじゃないかという方が半分、そうかもしれないとうなずかれる方が半分。半分でいいのである。私はその半分の方の味方である。

スティーブ・キューンがそうだった。ヴィーナスでキューンの評価が真っ二つに分かれた。はるか昔、ECM時代のキューンに洗脳されたファンは、ヴィーナスでの意外なのりに驚いた。腰を抜かした。あげく、ヴィーナスの「やらせ」ではないかと動ぐったのだ。こういうのをガスのカングリという。

ジャズメンは基本的にレコード会社のいいなりにならない。レコード会社も強制はしない。できない。一部の日本人プロデューサーを除いて。そしてその種の強制作品は必ずファンに見抜かれ、いずれ脱落してゆく。プロデューサーは信頼を落とす。レーベルというのは「レーベル・イメージ」という言葉があるとおり、なによりイメージを大事にしなくてはいけない。あのレーベルの作品ならきらいなミュージシャンのものでついで買ってしまう。これがレーベルのかかげる目標というものだろう。生命線というものである。

私は少し前にNYでスティーブ・キューンを観た。「ニッカー・ポッカー」というライブ・ハウスだった。そこでキューンは、日本で、そしてディスクの中でみせたと同じような、のりの演奏を行っていた。今のキューン、なのだ。人間は変わる。ひとつの檻の中に閉じこめておくのは、ファンのエゴというものである。

メイバーンしかり。このアルバムは、2001年11月のエリック・アレキサンダー・カルテット来日をとらえて録音されたものだ。ヴィーナスは少し前にメイバーンのCDを作っている。このところヴィーナスの原さんはメイバーンに「凝って」いるのである。

こういうプラス方向の気持ちがミュージシャンに伝わらないわけではない。録音当日のミュージシャンの気分は沸騰点にあったらしい。原さんは当初、エリック・アレキサンダーには2曲演奏させるつもりでいた。しかし、どうしても「もっと吹かせてくれ」とせがむ。苦笑いす

<p><b>Kiss Of Fire キス・オブ・ファイヤー</b>  <b>Harold Mabern Trio ~ Special Guest Eric Alexander</b>  ハロルドメイバーントリオ〜スペシャルゲストエリックアレキサンダー</p> <p>1. ハウ・インセンシティブ・  How Insensitive 《 A. C. Jobim 》 ( 6 : 25 )</p> <p>2. イッツ・ア・ロンサム・オールド・タウン  It's A Lonesome Old Town 《 Tobias , Kisco 》 ( 5 : 53 )</p> <p>3. ナンシー・  Nancy ( With The Laughing Face 《 J. Van Heusen. 》 ) ( 7 : 42 )</p> <p>4. バグス・グループ  Bag's Groove 《 M. Jackson 》 ( 6 : 14 )</p> <p>5. ブルー・ボッサ  Blue Bossa 《 K. Dorham 》 ( 5 : 38 )</p> <p>6. 黒いオルフェ  Black Orpheus 《 L. Bonfa 》 ( 8 : 21 )</p> <p>7. チーズ・ケーキ・  Cheese Cake 《 D. Gordon 》 ( 9 : 08 )</p> <p>8. リカード・ボサノバ  Recado Bossa Nova 《 D. Ferreira 》 ( 5 : 38 )</p> <p>9. キス・オブ・ファイヤー  Kiss Of Fire 《 A. Villoido, L. Allen 》 ( 4 : 52 )</p> <p>10. ブラジル  Brazil 《 A. Barroo 》 ( 4 : 40 )</p> <p>ハロルド・メイバーンHarold Mabern - piano  ナット・リーブスNat Reeves - bass  ジョー・ファーンズワースJoe Farnsworth - drums  スペシャルゲスト：  <b>エリック・アレキサンダー</b><sup>*</sup> ( 1,3,7,10 ) Eric Alexander - tenor sax  録音：2001年12月2日 東京、BSTスタジオ</p> <hr/> <p><b>*</b>  Produced by Tetsuo Hara.  Recorded at "BST- Studio" in Tokyo on December 2nd , 2001.  Engineered and Mixed by Shuji Kitamura  Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：  Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .  Front Cover：Alex Majoli / Magnum Photos Inc.  Designed by Taz  Special Thanks：Mon Production / Yoshiki Nishikage  Eric Alexander appears courtesy of Milestone Records.</p>
--

る原さん。盛り上がった雰囲気のままレコーディングに突入した。なぜかラテン・モードに入っていった。モードといえは、どうしてもメイバーンのピアノはモードっぽく聴こえたりする。のりとモード。この二つの相容れない要素がメイバーンを不可解難物にみせていた。でもそれがメイバーンの個性なのだ。

ジーン・ハリスやオスカー・ピーターソン、あるいはレッド・ガーランド、ウイントン・ケリー。みな、のりの人たちである。でも同じのりでも、メイバーンのそれはこの人たちとは違うのだ。この人たちより確かに理解しにくい。この人たちのほうが単純である。単純だから理解しやすい。理解しやすいけど飽きるのも早い。

メイバーンだって単純といえは実に単純だ。フレーズという意味の話で私は言っている。私に言わせれば、メイバーンは二つか三つのフレーズで生きている。否、フレーズなんてどうでもいい。のりが先にあって、フレーズは後からついてくるものだ。フレーズの探求にかまけてのりをおろそかにするピアニストとオレは違うんだ、さあ、どうだ、どうだ、とせわしなく迫ってくるハロルド・メイバーンである。

ラテンの話。のりとラテン。世の中にこれくらい激しく合ってしまうものもない。

今回の成功の秘密のひとつはこれである。なんていったって『キス・オブ・ファイヤー』ときたものだ。ヴィーナスの作品タイトルはいつだって扇情的だが、なに、タイトルっていうのはそそらなくてなんのタイトルか。センスとやらを重んじて、せっかくの演奏を温度感の低いものにみせているタイトルの実に多いジャズ界である。ヴィーナスのタイトル付けを見習え、と言いたい。

「キス・オブ・ファイヤー」の派手なタンゴ・リズム。あまりの派手さに思わず笑ってしまうが、重々しい顔つきでスネアを叩くジョー・ファーンズワースが目の前に見えるようだ。この人、本当はいか

にもアメリカのドラマーらしくジョーク好きで、陽気で、私ははっきりいって大好きだ。オンナ好きなどころもドラマーらしくていい。

ドラマーは女性にもてないという。なんとなれば演奏終了後、ドラム・セットを片付けているうちに他のメンバーにさらわれてしまうからだ、というジャズメン・ジョーク、知っていますか。そんな伝説、どこ吹く風。せつせと女性のお尻を追いかけては失敗しているジョー。実にほほえましいナイス・ガイである。少し前にダイアナ・クラールのドラマーを務めた。ハロルド・メイバーンいわく「彼、ビッグ・マネーを稼いだよ」

サンバの「ブラジル」、エリックは知らなかったそうである。私はその話を聞いてうれしくなった。30代前半の若いジャズメンだもの。それでいいのである。オッ、いい曲じゃないか。吹きたい、吹きたい。目を輝かせて吹く。メイバーンに教わって「こうかい？」 初演である。初演こそジャズの精神力と思う私である。これから彼の有力なレパートリーになってゆくだろう。

「黒いオルフェ」と「ブルー・ボッサ」。個人的な話で申し訳ないが、私はこの2曲にすでに食傷してしまって久しい。もういいや、という感じである。しかしメイバーンのスタートを聴いて、こういうふうに弾くならOKこのうえなし、と思ったのだ。ぜんぜん普通じゃない。どこか風変わりでいながら正しいのである。正統でありながらどこか人を惹きつけるのである。

のりのメイバーンでありながら、実はのりだけの人ではなかったのである。ちゃんと考えるべきところは考えている。ありきたりの、メロディおりの演奏はやらないぞ、と。このメイバーン風アレンジは、好きだ。

メイバーンがエリックと来日するたび、私は彼に「イツツ・ア・ロンサム・オールド・タウン」いいねえ。そう、囁き続けてきたのである。DIW盤の『ルッキン・アット・ブライト・サイト』で彼は初演した。メイバーンがこの古い哀愁の曲をチョイスしたそのことだけで身震いするほど嬉しいが、そのプレイたるや実に彼の体躯のごとく堂々とした哀愁プレイで、私は一聴するとすぐに気に入っていた。

今回その曲が入っている。原さんが伝えてくれたところによると「ミスター・テラシマが好きだから演ろう」とメイバーンが言ったというのである。どこかの国の総理大臣ではないが、私は感動した。少しDIW盤よりテンポが速くなっている。その分、のりがいい。やはりのりのり大会の中でのこの曲だから、華やいだ哀愁になったのだろう。DIW盤と同じムードだったら、つまらない。ジャズはガラッと同じ曲でも違うその時々によって局面様相を変えるから面白いのだ。

そして今やメイバーンのオハコになった「リカード・ボサノバ」。どうもこの曲が本アルバムの原形質だったような気がする。この曲を中心に発展していったように思われる。カルテットのライブを観た方はそれがおわかりだろう。とにかくメイバーンが恐れ知らずにのりまくるのだ。

音がいい。相変わらず精力全開、エネルギーがフル回転的に音がいい。だからこそ全員ののりがすき間なく伝わってくるのだ。ヴィーナス・サウンド。いまや全世界一の音にのしあがった。ハロルド・メイバーンのベスト作をこの音で存分にお楽しみください。[ 寺島靖国 ]